

広島県立美術館

研究紀要

第7号

- アジアの工芸調査ノート -タイ・ミャンマー(ビルマ)の漆芸・染織- 村上 勇 1
- 個人蔵「厳島・住吉祭礼図」-堺市博物館蔵「住吉祭礼図」のその後- 知念 理 39
- 『改正香道秘伝』(上巻)の翻刻 石橋健太郎 47
- 南薫造「インド日記」 藤崎 綾 1

2004



BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL
ART MUSEUM

No.7

2004

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

『改正香道秘伝』（上巻）の翻刻

石橋 健太郎

香書・香道書の出現

香を主題として著されたいわゆる香書は、平安後期から現れ、薫物についていくつかの著述がなされた。安土桃山時代には、一木の香の香りを聞く、聞香について述べられた香書が現れた。^①その後次第に聞香の方法・規式が定まってゆき、その規式について述べた、いわゆる香道書が著わされてゆく。江戸時代の太平は、経済発展をもたらし、町人を主役とする元禄文化や文化・文政期の文化を生み出すのである。

古代末期から中世に流行した薫物の担い手は、経済的に富裕であった公家・武家などの支配者層の人々であった。時代は近世に移り、一木の香を聞く聞香が盛行されるようになって、近世初頭の香文化の担い手は、やはり武家を中心とした支配者層に変わりなかった。

ところが、十八世紀に入り、経済的な力を持つようになった町人層が、香文化の担い手となってくるのである。近世初頭から体系化され、規式が定まってきたことと、香文化の町人層への急激な広がりとが相俟って、文字による香文化の伝播、つまり香道書の版行が盛んになる。故に一八世紀中頃が、香道書の出版のピークとなったのである。茶道

書・華道書の版行数に劣るとはいえ、その数は数十に上る。^②

香道史研究の現状

これらの香道書の記述内容を、詳細に調査研究すれば、香道史研究は大きな成果をあげるはずである。現に、茶道史・華道史研究は、第二次世界大戦後のカルチャーブームに後押しされ、茶道書・華道書研究が進んだ結果、さまざまな角度からの研究が発表され、その歴史を明らかにする大きな成果が挙げられている。

一方、香道史に目を転ずれば、その状況は一変する。研究の基礎となる、香道書の翻刻すらほとんど進んでいないのが現状である。香木の希少性が遠因と考えるのだが、第二次世界大戦後にも、茶道人口や華道人口の飛躍的増大とは対照的に、香道を稽古しようとする人は増えなかった。大戦後のカルチャーブームに乗れなかったのである。

遅々として進まない香道史研究であるが、近年、競争社会に疲れた人々が、癒しの手段の一つとして香りに注目し始め、遅まきながら香道の存在が注目され始めた。その影響により、香道史への関心も少しは向けられるようになったようである。歴史家ではない人たちによつ

て、香道書の翻刻がなされる例が見られるようになったのである。尾崎左永子氏による『香道蘭の園』及び神保博之氏による『香道賤家梅』などがそれである。

『改正香道秘伝』

そこで、私も香道史研究の取り掛かりとして、香道書の翻刻を行ってゆこうと思う。

本稿では、『改正香道秘伝』の上巻の翻刻を示す。

『改正香道秘伝』は、別名『香道秘伝書校正』ともいわれ、享保十九年（一七三四）の跋、元文四年（一七三九）刊で、大枝流芳の校正の香道書である。二巻に附録二巻があり、内容は、『雪月花集』、『志野宗信記』、『香合式』、『宗温六十一種香名』、『宗入香炉図』、『建部隆勝香之筆記』、『十組香之記』、『香之記』などの桃山時代の香道書八部を校正、合冊したものである。そして附録の『奥のしほり』においてその考証をまとめている。

（翻刻）

改正香道秘伝

付録奥のしほり

刻校正香道秘伝題辭

衆技各有法有法者有道其道據何模楷当読先覚之書先覚巴已言岐旨隱雖有其書三写而成魯魚使晚進迷津余多年樂此道時探四方旧卷校之正之而藏筒道書房焉鏤田再叙旧聞參以新得尚恐瑕類未深豈為大方引削方竹杖添雖是嘲乎庶幾幸明者訂之。

校正香道秘伝書

凡例

一此書ハ古来先達乃筆記せる書八部を合璧して、香道秘伝書と号し梓にちりばめぬ。古来此道の奥秘を書伝へて、香道の経なるものにして甚秘すべき書なるを、維かかくみだりに世にもらしけむ。然ども梓行乃時校正を加へず、孟浪に伝写し、後人の細注本文に混じ、或ハ文字烏焉馬乃誤脱漏のミ多し。今四方に類書数部を集め校正し伝る書中解がたき事ハ附録に弁す。

上巻

一雪月花集一卷。

右ハ御家乃六十六種の名香其外百三十種の名香京極道營所持の名香百七十七種乃名目なり。御家より乞求て志野宗信写して家に伝ふる書なり。古板下巻の第二に入といへども御家乃古書たるによりて写して上巻の第一にをく。

一志野宗信筆記一卷。

右ハ宗信筆記せるものなり。八十八箇条ありて、此道乃規矩とすべき書なり。此書古板上巻の始にありといへども今第二にうつす。

一香合式

右ハ宗信筆記しをきしを宗温省巴と代々伝て、又省巴門人へ伝し時、此書乃奥書を添られしと見えたり。後代香合の定式なるものなり。此時乃香之記ハ爰庵子の判の詞書西三条内府公の跋等別に一卷ありて家に伝ふ。

一宗温六十一種香名一卷。

右ハ宗信の子宗温の筆記し置れし香名なり。世上に六十一種の香と云ものはなり。

下巻。

一宗入香炉図一卷。

右八岌翁齋宗入香炉並に飾の記にして後世の規矩たるものなり。此書古板下巻の終にあり。今下巻の始にうつす宗入八宗信が末流の人なるべし。

一建部隆勝香之記一卷。

右八志野末流建部氏の筆記なり。其事宗信と大同小異あり。又古法を考べきにたよりあるものなり。古板八上巻の終にあり。今下字オ二にうつす。

一十組香之記一卷。

右十組香ハ古来よりあり来しを細川幽齋子始て文となして、筆記し■ふものなり。余が家に伝る所著ものハ、細川氏真名序あり。系図香ハ後世ハ図に名目を付れども是ハ後人の作にして抛もなき事なれば、今古法のまゝにして、是を補ハズ。源平香盤立物の図古板ハ略にして、初心の人弁じがたし。因て今委く絵図となして、補入す。本書ハ古板のまゝ是を存す。名所香に兼用する時は、盤の趣かハれり。只源平香にのみ用るハ、此本の図にしたがふべし。此十組香古板下巻の第四にあり。今下巻第三にうつす。

一香之記一卷。

右香之記ハ誰人の作たる事をしらず。志野氏建部氏の事しばく云といへどもたしいかに正伝ある人の作なるべからず。其中いぶかしき事多し。殊に初張の一紙甚疑べし。其中又益あることも多し。これも又古書なればみだりにけづり御らんに忍びず。下巻の終にうつす。其論八条下及付録に弁ず。

一八部の書毎の終に考正異同の考を附す。旧板に誤るものハ他本に照

し合せて改るものなり。是にハ囲を付る。他本に吳にしていづれか是なる事をしらざるものには圈を本文のかたハきにつて、考正にこれを弁ず。古板の誤他本の吳同をわかちやすからしむるものなり。

一附録奥之葉二卷。

右ハ本書八部の中解がたき事、又ハ其餘意をのべて初心の人にたよりす。

大枝流芳記。

香道秘伝書校正卷上

大枝流芳校正

雪月花集

五十種之内

神楽。立舞袖。榊。ほう。林下。上馬。薄紅葉。山陰。人。かゞ見。早梅。そりう。笛。般若。うかくぼく。千鳥。二葉。白鷺。おきな。りんせう。あげまき。立田。黛。都。斜月。似。芙蓉。金伽羅。面影。かるかや。なごし。杜若。はしくろ。夏草。雪。奈良芝。

羅し津、須磨、明石、麒麟、孔雀、ゑも木、中川、葦垣、おぼろ、久菊、新枕、うつり香、中ツ、小糸

已上。

十種之香。

太子、蘭奢待、逍遙、三吉野、紅沈、古木、中川、法花、花橘、八橋。

已上。

追加六種。

園城寺、念珠、沈外、赤梅檀、丹霞、仏座。

已上。

右御家之香次第。

名香目錄。

日影花、有明、夕時雨、薄雲、大井川、ちぢみ、新樹、若菜、三芳野、
 雪壁、初菊、初瀬、明石、手向、探梅、清香、八重菊、玄々、浮島、
 冬野、お波、中川、花散里、くろかう、をしま、男山、歳暮、青、
 朝気花、**大ぬさ**、**囲碁**、**なごの江**、古川、紅、薄紅、紅葉賀、春浜、
 川浪、青葉、作、楫枕、須磨、名、憂船、はし姫、荷葉、身をつくし、
 よこ笛、七夕、**いざ宵**、**葛枕**、いさ枕、中春かく、人、冬、柳、八
 重垣、すぐ梨、寸代、きく、雁が音、みかさ、小倉、最中、あふち、
 花薬、松乃戸、りむがく、すう野、お寺、三ヶ月、湘竹、ふじ、野々
 宮、摘、神楽、立舞袖、塩屋、ふよう、庭梅、**富士煙**、**はんとう**、
古、訪友、玉蘭、立田、仙、よこ雲、杜若、山こし、くす玉、五月
 雨、ながらの橋、あやめ、水蓼、初秋、逢坂、夕霧、唐衣、まがき、
 こじま、苧萱、夕暮、小春、山陰、蕙花、幽蘭、婆女、手枕、名越、
 十九、転寝、彘、松風、初雁、白鳥、林雪、音羽、八、溪水、柴山、
 竹雪、しべ、さつけい、初雪、しるがもと、新湊、花溪、山。

京極道譽所持。

名越、宮一、青山、朝霧、かんざし、朧、**りうほう**、磯山、薄紅葉、
 梅風、忍、すすき、澤山路、**朝風**、理、房主、**弄郷**、陸河、宰府、
 前無名、**岩枕**、ふよう、りんさむ、春浜、夕楼、遠矢、曉露、遠景、
 寒草、林月、陵波、雪江、洞庭、林鐘、枕、竹馬、篠目、溪竹、あや
 め、**河淀**、芳村、竹葉、吐月、小雪、桂風、風絮樂、庭桜、早苗、
 白浪、晚花、漏月、秋風、紅葉、塩路、老梅、**露菊**、寒梅、六月、
 雲抄、柳花、霜夜、雪中、春鐘、籠江、踏花、**薄氷**、嶺松、早梅、

杜若、秋草。春水、海棠、深山路、初音（羽衣）、長安月、端午、鷓
 首、雨夜、節柴、浜楸、御船山、葵、春草、私語、冬松、清水、藤花、
 寢覚、竜頭、花陰、夏蕙、尾上、廉嶋、**送春**、夕月夜、簪、丹楓、
 暗香、唐絹、**星合**、鵜川、紅柳、花林、松雪、稻菰、万代、古郷、
 曙、埋木、清風、林雪（林葉）、海月、山風、木下、村雨、花水、鳥
 羽田、鳳毛、秋芝、夏箕河、宮梅、若松、春蘭、一声、曉月、斜月
 小田守、**花径**、軒梅、春遊、岸松、**冬恋**、蠟雪、映雪、五節、松風、
 秋山、秋蓮、鈴鹿、紅梅、仙風、殘雪、五更、女郎花、朝明、送月、
 碧桃、林鶴、迦羅、新三芳野、玉章、夕くれ、石帯、宇治、いふばか
 り、窓梅、松葉、あらまし、三冬、片糸、桜、手、けいりん、庭、蘭
 奢待、林下、山桜、いんりう、白雲、真木の戸、花雪、寒月、山下風、
 法花経 一文字。

此一帖西三条前内府御本申請令書写者也。

彼御本飛鳥井之筆也。

天正式。霜月日。志野宗信。

右西三条家御香之目錄雪月花集、志野宗信伝写するものなり、古板本
 誤多し、以古写本数部校正其考拠左のごとし。

享保甲寅年正月。

大枝流芳記

雪月花集考正。

はう 一本法の字を用ゆ。

そりう 一本楚流の字を用ゆ。

白路鳥 以異本改白鷺。

代黒 以異本改黛

考 此字誤よつて以異本都の字に改む。

なこへ 異本によつてなごしに改む。

夏菊 一本に菊を草に作る。

羅しつ 一本にこしつにつくる

足垣 一本に葦垣に作る。

火草 一本に久菊に作る。因て今改其。

十種之香の中肩書に後人の細注有。今本文にまぎれん事を恐て削り去。

丹加 一本に丹霞に作る。是にしたがひて今改む。

仏産 吳本に仏座に作る。或云仏の台座なるにより名とす。此説によれば産は座なるべし。

大ぬき 吳本によつて大ぬきに改む。

なこ江の 吳本によつてなこの江に改む。又波野に作る本あり。

春浜 吳本に春溪に作る。

荷葉 一本に葛葉に作る。

七夕の下 いざ宵、葛枕の二名を脱す。今是を加ふ。

寸代 一本に十代に作る。いづれか是なる事をしらず。

杞気 一本にたけに作る。

庭梅の下 富士煙、はんとう、古、三名を

脱す。今これを補。

水蓼の下 一本「初秋」の一名あり。

十九 古本かな。付誤る。ねかもたなり。万葉集の詞のよし。

初雁の下 手向あり重複ゆへ今けづりつる。

泊瀬 初瀬に同し。前にも有よつて、除さる。

さつけい 一本さつけいに作る。

新湊の下、古本くず枕有。今真本により上へうつす山の下、古本七たはいさ宵の二名あり。真本によつて今上へうつす。

京極道營所持之内。

りよう 吳本によつてりうはうに改む。また一本にりうようにつくる

書あり

秋風 吳本に朝風に作る下に秋かせあれバ恐ハ朝風是ならんかよつて

こを改む

弄郷 吳本によりて弄郷に改む。また一本に花歸に作るものあり。大

なるちがひなり

岩桜 吳本によりて岩枕に改む。

枕 一本桂に作る。いづれか是なることをしらず。

河浜 正本によりて川淀と改む。

風絮樂 一本に樂の字なし。

薄 古板早苗の下、薄あり。重複なるによりてこれを除さる

秋風 一本に雄風に作る

露菊 正本によりて露菊に改。

露菊の下名越あり。重複す。正本になし。因之今削さる。

雲抄 一本に雲霄に作る。

薄水 正本によつて薄氷に改む。

秋草 一本に秋菊に作る。

長安月 一本に長夜月に作る。

雨夜 一本に雨衣に作る。

節柴 一本に節木に作る。

浜楸 楸の字古本の通なり。今按ずるに恐は荻の字に誤ならんか。

送月 正本に送春に作る。送月ハ又後にありよつてこれをあらたむ。

皇台 正本により星合に改む。

山風 一本に嵐に作る。

秋芝 一本に秋蘭に作る。

花榭 正本によりて花径に改む。

冬慈 正本によつて冬恋に改む。一本には冬とはかり有て恋の字なし。

猊雪 一本に暁雪に作る。

硯桃 正本によつて碧桃に改む。

加羅 一本になし。恐ハ達を付しか。誤て名のごとく伝写せしか。

松葉 正本によつて松葉に改む。

林下 一本に隣家に作る。

いんりう 一本にかんりうに作る。

白雲 一本に白雪に作る。

奥書に此一帖の下西乃字あり。今正本に因て補入す。

大枝流芳校正。

志野宗信筆記。

香道心持之事。

一、たぎ組の香、奥行有ば、其人数の方へ、兼日に理を申。香の数持て出られ、縁をよく取合てたかれ候様に、可有候。凡連歌の付合などに相似候か。雲井とたかれ候ハ、有明とたぎ、又うたゝねとたく時ハ、ねざめなどとたくやうに可有候。四季乃香、又恋の香などいづれも縁をよく取合たかれ候事、尤にて候。さりながらよき香斗ハ有がたき子細に候間、香数多通り候時ハさのミ縁にかゝわられまじく候也。

一、当座にもよほし候香にハ、縁を不取合候共、たかれ候ハ、可然

候。但又縁をよくたかれ候へは、尤無比類子細に候。俄の奥行にハ、縁をよくく取合事難成候間、持合香をたかれ不苦候也。

一、四季の香と云ハ歌道無案内に候へ共、凡其季持と云ハ歌道の心可成候。春ハ若菜、夏ハ夏草かきつばた、秋ハ八重菊もみち、冬ハ初雪寒草など、大形此心持候。恋の香に手枕又しのぶなど、たく心得に候。其数何も多き事に候間、一炷二炷宛為心得しるし候なり。

一、上々香を二炷三炷も通りてハ丹霞沈外などをたかれ、其後座躰をあらためおもひくゝにたかれ候やうに可有覚悟候。此心持才一也。

一、香をたく事、会主はじめてたき可然候。但座躰により誰々成共たかれくるしからず候。香炉に火取、人衆中へ一旦たかれ候へと、礼を申可焼事候。開時ハ座上聞て、一とおりに通て、扱香主乃前へ来。又をし返し、一とおりとをし二度宛何も可被返候。乍去十人より上ハ一通にて可被置也。

一、香被聞時、老若共二身に似相候。躰可有覚悟候。子細候若年の人ハ香のこと分別行候共、聊もこうしゃぶりは無用二候。かほりを久敷聞てハ大にわろし。又聞しり候躰にて、うハの空に聞事もうかめだてにて、ぶ執心に見え候てわろし。座中の老人の上より香を感じ名なども作人に尋躰尤に候。老若共に久敷あかほりを聞事、不可然候なり。

一、香間に香炉を前へ引かたふけて、聞はわろし。ぎんも時によりて、はしり候。又香も銀乃上をはしり、灰へおち候。蘭奢待返し九度焼迄所持候を、去人かう炉あしく被持候て、此名物はしり候。十度迄たかづ失候なり。

一、香炉取上て、鼻息荒く聞手にて、かほりをまねきかけきく事、沙汰のかぎり有間敷子細候也。

一、我たく香を人の感じ候とて、ひばし候。言葉かりそめも無用に候。其故は香はくがい物にて候。名をバたしかに一度二度とハれ候て、即あらハして可申候なり。

一、香通り候時、我次の人に一礼あるべし。懇に座中へ礼義無用なり。一、香乃会とふれられ、罷出日ハ空焼有間敷候。不及申、焼物など取扱有ましく候。懸香なども無用也。

一、茶の湯会の時も、茶過て香を可出と存候日ハ、前々申ごとく空焼風炉いろりなどへ、くべ候事無用候。余所にてても、茶の湯会に空焼なくバ、必々香可出と存候而、兼而たくべき香を覚悟有べく候なり。

一、香を聞時、かうろの灰を見る事有間敷候。子細候。香とをりて以後、可被見候。賞翫の人灰ををされ候ハ、香以前に所望候て、見べく候なり。

一、香を聞時、貴人御座候とも、被召出香聞程乃身躰に候ハ、座中へ入て可被聞。かりそめもえんにて聞まじきなり。

一、香の通り候座中にて、扇あらくつかひ候事、不可然候。惣別扇ハ、用捨可然子細候。然とも時分によりつかい候時は、そろくと分別有て、被遣、尤候也。

一、名香一焼に、木がさを多くたく事、大にあやまりなり。若、座中多人数乃時ハ、少木がさ大にたくべし。

不然ハ、是程の心持に木かさ、たるへき也。

五六人の時。

一、ぎんに香こがれ付候とて、火にくべやく人あり。あやまりなり。何時も、こがれ付候ハ、小刀にてこそけ落して置也

一銀の置取と云ハ、香ばしとゆびにて、ぎんの角をはさみ香ばしを指

より下にして、香炉に置取時も同前に候。又指にて箸よせずにも、置取くるしからざるなり。

一、銀の寸法ハ九分四方にして、すミハ一分宛にとるなり。

一、香通り後、惣返しをハ、きんの上に置いて焼、亭主、座敷のかたわきにをき申候。置所口伝なり。

一、れうせん香、春日野、其外薫物の類焼時は、ぎんをかへてたかれ候物なり。名香聞時乃銀にてハかりそめにもたく間敷候。又香の前、中ばにたく事、有間敷候事也。末に焼べし。自然の事なり。

一、春日野ハ聞時心づかひあり。其故は四五人の前とをりて、必ぶちりと云て、飛候物に候。古もさる人乃覚悟なく候て、あやまりを仕候に其沙汰可被心得候なり。

一、香を人に所望候時、一たきと云ハ、悪し。

一、炷御焼候へと所望するなり。

一、人香を所望の時、其時分の季の香、尤に候、乍去、其国乃大名はじめたる賞翫乃人、若前にてハ、季の香か賀か上薫か尤候。東山殿御小座敷新敷立申候に付而、其御座にて、御香炉参はじめに拙者焼申せ乃よし、御意候間、八重垣を焼いろく心づかひ在之。口伝なり。

一、香炉に火取て、香炉、底へ火つよくとをり、香炉あつく候て、持にくき事有。其時ハきれい成物に、水を入れて、香炉を三分程、底をひやして出す物なり。

一、人の新宅わたまし、近き所にて、香奥行あらバ、鴨乃香炉にて可被聞候。なき所にて候とも、不知ふりにて鴨の香炉候ハ、其にて被聞候て、可然候よし申候て可然候也。

一、盆にすハる香炉ハ左の手にて盆を持て、右の手にてかうろをとら

へ、座敷へ出る。又座中にて居ながら請取渡ハ盆ながらをしまハして、出ずあゆミ候時、かうろをとらへず候へハ、香炉はしり候物なり。

一、大仁ハ盆ながら、被聞物にて候。武家ハ大名衆まで、御聞候。それも香炉に手を付物候。泉さる御方、手をも不付に被聞候て、千万く見苦敷候つるなり。

一、平仁の時、盆ながら出する事、無用二候。盆^を床に置事も在之上座にをく事も有。香炉斗出すべし。

一、香炉貴人へ被来候時ハ、左の手にすへ、右の手を香炉の底にあたる様にして、いかにも謹而、まいらせ候。即御請取候ハ、右のかたの手にて、香炉乃上をひつさげ候やうに御取候也。

一、同輩のかたへ香炉ワタスハ、左の手にすへて、右の手をバ香炉の中程のわきに小指さきをあつる様にそへて出す。うけ取人ハ、又左の手をば渡す人の手の下になるやうにして、右の手にて、香炉おとさぬ様に取上て、則左の手にすへて取なり。

一、下輩の人に香炉出すハかうろの上をかたてにて、引さげ候様に持て、そこを請取人の左乃手の上に置様に、渡す也。

一、児若衆並女房衆などへ、香炉渡す時ハ前へ持てより疊に置いてしかりて、手には不渡なり。

一、香可聞日、床に香炉を置合にハ、銀をハ香炉の底と盆との間に置べし。香合置合候時ハ下に沈上にぎん置申候なり。

一、香合香袋香炉置合の時ハ、名香五炷入、其香ハ四炷ハ心持次第何なりとも、一炷ハ其季の香を入べし。

一をし板五つかざりの香合にハ沈五切■、是程にわかつて、厚さハ是におゝじてつゝまずに入香の長さ四分広さ三分厚さ一分と人の尋候時、

こたふなり。たゞ香の可然を入名香ハ不入物也。

一、火をとる時、灰あたゝめ候心持、火を入其上に灰をかけ候て、又別の火を置いて、少あたゝめ、扱取出して、又別の火を前乃穴へ切めを上へなして入て、かげんよき時灰をかけをすなり。

一、聞香炉にかぎり灰をハ五合にをす。賞翫の箸とて子細候口伝有。一、灰をハ香炉せかいより少高くかき上て、をし候。但、灰すくなき時ハありのまゝに可有なり。又多き時もありのまゝ、たるべきなり。

一、ワが香焼時香立候か、立ぬかとして、久敷聞候て、本式にかほり立候てから、人に渡す事不可然候。少かほり立かと思ふ時分に、人に可渡。又こやしや火を能取て前に通る香も、則立とおぼし候ハ心ミせずとも可然也。

一、我焼香、火つよき香にて、不立候事在之。然バぎんをゝすハ不可然候。其子細ハ後に人のたく時、いかやうの香を可焼を不知候て、いかゞに候。但来座にてハ可被^致覚悟候か、可在分別也。

一、児若衆に香所望之時ハ、包紙ながら、そバの人に出したかせ申候て、可然候也。

一、香可聞日、香炉床に置時、灰をしてハ無用也。かきあけてをしなにして置べし。香聞まじき時、万一香炉ばかり置合事ハ、御座敷かざりのごとく灰をして置合可然候也。

一、香上包紙、杉原にハ無用二候。其故はうつりが在之物二候也。一、卓並かんばんに香炉香合置合在之時ハ、香炉香合斗を取おろし、火を可取。卓もりんばんもそのまゝ床に在べきなり。

一、中形の盆四方盆長盆くつがたの盆、何も盆ながら取おろし、火をとり、可申候なり。

- 一、風雨にて香聞時ハ、風の面へ我身をなし、可聞事に候也。
- 一、茶之湯の時、香興行、在之バ、無上薄茶已後、香炉可出事也。
- 一、香袋の緒むすび様口伝事也。

以上。

別而秘伝。

- 一、香炉の火つよく覚候時ハ、火つよき香を焼、扇などの様に、火よハき香ハ、火あいつよく候時ハ、用捨有べし。火つよき香、火よわき香の口伝在之也。

一、香かほり不審に覚候ハ、木色を見る事あり。又兩種の名物ハ殊木色迄、能く見る事。尤候。同木のうちにても木所により、事外に違候事也。

一、香通り候中程に、焼まじき香沈外、赤梅檀にて候。又云、此香ハ勝たる香、通り候時、色匂にたかれ候へと申に、定候指たる香も、不通に沈外たく事ある間敷候也。

一、太子の返し三度迄たくべし。此外は無用なり。

一、蘭奢待、返し十度迄たくべき香なり。此字か秘事也。

一、古木、返し三度迄焼べし。右三種乃

外に八十種の香成とも、不及申。其外成共返し取て、置重而、焼事有間敷候。又三種の返し返し取て焼事いかゞとほうへんするハ、物を不知故也。

一、香炉の火よハく成時ハ、かう箸にて、上に穴をつき明て、其穴の上に銀を置、香焼べし。それにてよハくバ、返しを一焼、穴の中へ立に入れて、それにて火をほうずる也。貴人御座候時ハ、少火をつよく可取。はなやかに可被聞召ため也。

一、香炉可然候ハ、客来より床へ御香炉おかれ候へと、亭主がたへ所望有べし。又客来之内、功者成仁、衆中へ理を云て、床へ上候ても尤候か、其座のていにより、覚悟あるべし。床に置時盆により、口伝オ一可被心得者也。

一名香並たゞの沈うつりか^の有をとりやう、一段秘事也。口伝沈五両に皮物粉茶三服程入て、水にてふつたて、香を入て一日一夜つけて置。其後又よき水にてなんどもこしらへ、白物をおとし朝日にあて、日つよくならぬ前にかげぼしにして、可然うすやうに包可申候事。口伝在候也。

一香炉火取、心持四色口伝あり。オ一乃秘事也。底の心持上、^{よハき}心持上、一分をす。心持指に覚心持あり口伝。

一法隆寺ハ天竺より、太子御取被成、渡給ふ香候。何の世にも出る沙汰なし。然にねずミの穴より鼠引出して、世に広まるよしを申伝候。

法隆寺宝蔵に、被籠候て、在之故法隆寺と云。又御名を御とり太子共申也。

一東大寺ハ御所様御一代一度、奈良へ御参詣乃時、為進物、昔より一寸四方参候。然バまれなる子細候。但太子よりハ類も在之義候。式木色三色に在之也。

一御吉野ハ東大寺のうすみといふなり。

一遣遥ハ南都法花寺に有といへり。東大寺乃皮と申伝たり。

一八橋ハ古木の皮目ともいへり。

一古木と号する事、道誉老人作分のよし。

一(上)はく中川(道誉)、(中)中中川(朝倉)、唐へちうせんと云僧を渡、取よせ被申候香也。(下)八風中川(公方様御物)

一 法花ハ九州法花寺より、大内殿の尋、御出候香なり。彼故法花と云也。法花経ハ各別なり。よしある香也。

一 夏草ハにほひもゑくとこき故也。

一 寒草ハ夏草の木うら成と云也。

一人やどりハとまりよきゆへと云。

一 あさ地ハあさくさびたる心なり。

一 さなへハ、あさぢより、よハきと云心なり。

一 あふぎハ末のかほりうすき故に、名付、扇の風ハ末とをらぬ故なり。

一 うたゝね、はしめうかくと立かほるなり。字ハ以上六ツなる故也。

一 岩角、奈良えしんるんに在之也。

一 赤梅檀ハ、我之聞伝故、尋出可渡秘也。天主之内。

一 丹霞、松子、尋出子細申上、三条殿へ得尊意、号丹霞也。

一、二見両面之香箱とも云。又二見のうちより出る故共云。宗祇香合也。

一、関戸ハ蘭奢待に似たる香なり。名物同前に心得有べし。

一、太子、東大寺焼後ハ、前に書申ごとく、丹霞、沈外にても、たゞ

二度も三度もしんしゃくして、不奥なりそうにも候ハ、此兩種にていろへ候ハんとむかしより乃定なり。

一、香を聞時、香炉火を取出候時、鼻をかみ色々に、風情あらため候事、不可然候。かやうの事ハ、物ことに在之氣遣也。

一、鴨の香炉に銀をくハ、すミを一つ、むねの方へなして置へし口伝。

一、鴨の香炉、取ワたしハ、羽がいにて、割どう乃かたに、首付候ハ、かしら我左のかたへなして、聞渡し様ハじゆん

に取わたすべし。

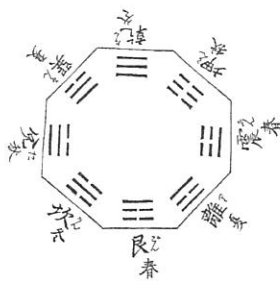
一、又どうにてワリ、羽がいにて、首付候は、むねの方我右へなし聞、渡やうハぎやくにまハし、渡可申候。口伝云、尾、貴人の方へ不可向也。

一、一切生物乃香炉、鴨と同前。請取ハたすべし。

一、香炉、火つよき時ハ、銀の上少わきに香をく心持あり。

一、八卦の香炉にて、香聞時ハ、其季のけを面になすやうに可被心得候。賞翫乃箸並盆の内、置合同前かやうの事を、聞そこなひ四季の灰をしやう、あるよしいふ、おかしき事なり。

八卦香炉之図



右の条々、口伝之事。自若年之時、数十年 三条殿へ依致懇望、被仰

聞諭為子孫抑置候。可被秘才一此道別人相伝申族、努有間敷候。其

故ハ唐物目聞方以下、能阿弥真相珠光、松本、拙者二、相究由被聞召候へ共、当時ハ存知者共、数多在之由候。出香之一儀ハ、別人不存

知様二有度被思召由、誠辱尊意、古今難有子細候、被成其心得。此一冊不可有外見候自然志深執心之仁ハ、其覚悟見届条数之内、抜可有相

伝無文字之上、源多言葉之躰、芳以不可有他見其此所劳砌、存立次第

不同二調置者也。

文龜元年九月日 宗信

右は志野宗信八十八箇之筆記と云て、万代香道の龜鑑なるものなり。甚貴賞すべし。房間の刊本誤多により校正し早

肯享保甲寅年正月

大枝流芳記

志野宗信筆記考正

一、名なくとゞも と字一つ衍文本書削之

一、然 古板断に作る今改之

一、名香一焼に木がさ云々。此終に不終ハ是程の心得に木がさたるへきなり。

五六人の時、不然と云よりの時と云まで、後人の住にて、木がさの図ありしものなるべし。誤て本文に混ず文章うたがひあり。其後他の写本と合せみるに、此文なし。因て旧板を改て、本書に是を圍で今こゝに、其考を出す。

一、盆 床の字をに改む。

一、香炉貴人への中 取候ハ、此下のゆすりのハ、重複なり因て本書削之。

一、をし板、五つかざりの中、是におゝ井て、此井字誤なり。おゝじてなり。本書改之。

一、可被理。理字以吳本、致に改む。

一、香袋の結。結字、吳本作緒。今本書これを改む。

一、古木返しと云条、三炷十炷と書。今写本と考合せ三種十種に改む。

一、香炉の火よハく、此中 つよき明て と云に字衍文ゆへ、今削さる。

一、名香並たゞの沈うつりかハ、有を、此八字衍字か、又一本にのに作る。今本書改之。

一、香炉、火取、心持此中 上■き。此字、解がたし。吳本にて考るに、よハきに、作る。今本書改之、また心持 あり。一本ありをなりに作る。

一、三吉野ハ、是より逍遥に至るまで、古板の本、前後錯乱し、逍遥の注、八橋の下に入。八橋の注、脱漏せり。八橋ハ羅國なり。何ぞ東の皮めなりとせんや。是誤の一證なり。吳本数部考合、古板を今本書のごとく改之。又古木の注の中、面白口伝二つより、こふると云口伝有。面白より口伝有、まで、他本に無之。考るに、文意後人乃注なるべし。誤て、本文に混ず。今これを削りさる。

一、うたゝねの中、立かほり、りの字他本に作る。因て、本書改之。又終に 一二三 乃字、これをうたゝねとよます。後人一二三と終に書加へ、かな付せしものなるべし。今これを、本書削去、其説ハ奥乃葉にあり。

一、鴨の香炉。此終に古板 しゆんにハたしわたすべし、とあり。他本にて考合すに、取わたすに作る。因て、本書、今是を改。

一、一切生物香炉云々、此一条、旧板前後す。よつ之今、改入かふるなり。

一、右之書、奥書の中、置伝と云。二字、他本に真相に作る。則相阿弥なり。今、本書改之。

右志野宗信筆記旧板誤れるもの、考改む。其改る證をしるして、世に伝ふる事しかり。

大枝流芳校正

志野宗信香合式

名香合の儀、一番より十番迄、二炷宛廿可通。人数も十人たるべし。然ハ一人より二種宛、香を可被出、其香に太子、東大寺をハ被相除、其外十種之内、又五十種之内を、可被出候。かむすびに二種通り候。香之内はじめ焼をバ左と定、後に焼をば右と定の香よきと思ふ

時ハ、左乃札を可打。右の香左よりもかほりまさりて、覚ハ右の札を可打。札乃調様、は、六分半、長さ一寸九分、又厚さ一分半二杉の板をけづり、其面に我々の名乗を書、うらにハ左と一枚、又右と一枚可被書候。包紙をハ、うすやう一枚を八ツに切て、其はしを細く名紙に裁かけて、香の名を上に書、其下に香主之名乗を書。四ツにたくみあげて、ひねり不見様に、可在之。同紙の中に香を包候。おさなひ人の十炷香とてもあそぶときのつつミ候ごとく、何も口伝在之。其頃、出宅奥行時乃請不在。失念候、惣別、昔、香合と云事不及聞候。三条殿御家二、薰物合と云事御奥行候。其縁を取て、奥行仕度比、得尊意候処、珍敷尤二被思召候。後、迄名を殘奥行と御褒美被成。前後以御指南、奥行候判者、夢庵、跋ハ三条殿二申上候。連座のうへハ、不可有失念者也。

右之一札写心入候事、別而無御閑宗温時より御殿志之儀と申。此度黒金方、目聞を被仰聞故、芳以如此候。■本五十余ヶ条之義ハ、他見候無、此書外見候てハ可為迷惑候。

永祿元年月日 省巴

志野宗信香合之記考正

名香合 此下の字異本にあり。今補之。

五十炷 炷字異本によつて改種。

香の名を上 上の字の下に字脱今補之。

不見の の字衍文本書削之。

おさあひ あ字本書改ふ字

十種香 種字依吳本改炷

何も口伝在之。 其比出宅奥行之時の請ふ。可在失念候。

候と云まで吳本にこれなし。

珠処 珠字以一本改珍字。

花 以異本改尤。

右之奥書之中黒金方此黒金の二字。恐ハ書誤ならんか。余未考識者乃明解をまつのみ、又如此候の下■本此本の字乃上の字難解。恐ハ前の字ならんか。「日省」此日の字、上の月の字の下に有べし。省の字下巴時脱す。今因吳本本書改之。

右香合の校正旧板之吳同、爰に記して校正之趣をしらしむ。

大枝流芳考正。

志野家六十一種名香目録

法隆寺 東大寺 逍遙 三芳野 紅塵 古木 中川 法花経 花橋
八橋 園城寺。追加
以上十一種。

似 富士烟 菖蒲 般若 (伽羅 大内) 鷓鴣斑 楊貴妃 青梅 飛
梅種鳴 (伽羅 追加) 漂滯 月 (禁裏様) 龍田 紅葉賀 斜月 白

梅 千鳥 法花(追加) 大内) 老梅 [追加] 八重垣 [追加] 花宴
花雪 明月 賀 蘭子 卓(追加) 御物) 橘 花散里(追加) 丹
霞(追加) 花形見 明石 須磨 上薰 十五夜 隣家 夕時雨 手
枕 晨明 雲井 紅 泊瀬(追加) 寒梅 二葉 早梅(追加) 霜
夜(追加) ね覚(追加) 七夕 篠目 薄紅 薄雲(追加) [上馬]
以上五十種

都合六十種也。此内十三種追加分、右老父宗信慥所伝授也。今
我知命之後、別而、就執心口伝共不遺一事相伝干末子不寒齋省巴早矣。
依之聊不可有外見者也。

志野入道

宗温

天正式霜月日

志野不寒齋

右者宗信子宗温が筆記する所の六十一種乃名香の目録也。古板本以有
誤字脱漏、今校正増入せしむるものなり。

享保十九年正月

大枝流芳記

志野宗温六十一種名香記考正

紅鹿 鹿字本書改塵。

追加 旧板此二字如香名太字に書て、花橘の左に例す。今異本を以て
改、細字となし、園城寺の下につづくこれ十種の中、園城寺一種追
加せしと云。注なれば今改之。

鷹鳩斑 鷹の字、本書改鷗。

老梅の下、追加の細注を脱す。今本書補之。八重垣、丹霞の下も是に

同し。蘭子のかた、古字、旧板に有。今削之。
終に上馬乃一種旧板に脱す。今補之。

五十炷 炷の字種に作るべし。

六十炷 一の字旧板に脱す。又炷当に種子作るべし。以吳本改之。

十二炷 本書十三種に改む。

右之書奥書之中省や此也時巴字なり以吳本改之省巴八宗温の子也。

右六十一種名香記、旧板誤字異動あるを以吳本によつて考之今爰に記
ししらしむ。

大枝流芳校正

香道秘伝校正上巻終。

【注】

① 管見では、以下の香書が知られる。

『後伏見院晨翰薰物方』伝後伏見院著。

『五月雨日記』著者未詳、成立年不詳。

② 『三条家薰物書』三条実香著。成立年不詳。

『志野宗信香之筆記』志野宗信著、文龜元年(一五〇二)成立。

『參雨齋香之記』志野宗温著、天文・弘治・天正年間(一五三二—一九二)成立。

『香道軌範』(成立年不詳十六世紀末力)蜂谷宗吾編著

『香道規範』講義

『香之書』池三位丸著 慶長八年(一六〇三)成立、

『香道秘伝書』寛文九年(一六六九)成立。

『香道蘭の園』 菊岡沾涼 延宝五年（一六七七）

『十種香暗部山』 空華庵忍愷律師著、享保十四年（一七二九）成立。

『香道千代の秋』 享保十八年（一七三三） 大枝流芳著。

『香道瀧の糸』 享保十九年（一七三四） 大枝流芳著。

『古十組香秘考』 大枝流芳著、享保年間成立。

『香道軒の玉水』 元文元年（一七三六） 大枝流芳著

『香炉図説品彙』 蜂谷宗先稿本、藤野専齋編次、江田世恭補校、元文（一七三六―四〇）頃成立。

頃成立。

『香道賤家梅』 牧文龍識書。寛延元年（一七四八）年成立。

『香道拾玉』 大枝流芳、延享二年（一七四五）成立。

『香道宿の梅』 宝暦頃成立。上野宗吟著。

『香道袖の橘』 上野宗吟著、安永三年（一七七四）、

『香道真伝』 関親郷著、安永五年（一七七六）

『香事むさし野』 島田貞郷録、江田世恭補、天明三年（一七八三）上下巻、

『古香徴説別集』 江田世恭編、天明七年（一七八七）成立。

『香道濫觴伝書』 江戸時代中期成立

『古今香鑑』 著者不詳、江戸時代成立、（『日本市民文化史料集成』活字本。）

『香道麓の里』 叢香舎春龍著 十八世紀中頃成立。

『春曙』 叢香舎春龍著十八世紀中頃成立。

『香道梅のしるへ』 叢香舎春龍著十八世紀中頃成立。

『香道深山雪』 叢香舎春龍著十八世紀中頃成立。

『叢香舎秘説』 叢香舎春龍著十八世紀中頃成立。

『米川十組香私記録』 叢香舎春龍著 十八世紀中頃成立。

『香之茶湯三十六段』 藤野春淳始識、

『香之記序』 伝細川幽齋著 成立年不詳、

『香道大意』 細谷松男著。成立年不詳。

『藤野卜翁香道打聞』 成立年不詳、

『香道之雑書』 成立年不詳、

（いしばしけんたろう／当館主任学芸員）

広島県立美術館 研究紀要 第7号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.7

発行日 2004年3月31日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel.082-221-6246 Fax.082-223-1444

印刷 大成印刷株式会社

〒731-0138 広島市安佐南区祇園3丁目24-17

Tel.082-875-3232